反して我等に對する嚴肅なる規律と特待とは、實に感歎に堪へざりき。路上の者は我等の過ぐるまで皆低頭し、箒を持てる二人の者は、行列の先頭に立ちて、「下へ下へ」と叫びて、我等の來れるを告知し、且つ些末の石片も塵芥も、道路より取除きたり。

【*譯註】西國島とは四國を指す。

二十五日、天候も風力も出帆に適するが故に、我等一同は朝早く乘込み三原を過ぎたり。此地にて櫓の多き大なる城廓を見たり。山に據りて更に高く一大寺院あり。日本人は皆酒を入れたる小樽に錢十三文を結び附けて、琴平神に献納するため、之を海中に投ず。漁者は此等の樽を獲て、之を附近に在る琴平神社に於ける彼等の守護神に捧ぐることを怠らず。我等は後方に田島村と廣島地方とを見、四十五時間を費し、百十七哩を航して。

三原

室

二十六日朝七時室に錨を下せり。我等は藩侯の別邸に入ることを

許され、是より室の明神社の方へ遊歩せり。此社は山に據り、風景絶佳にして、多くの壯麗なる殿堂を有す。就中相連接せる五棟の堂宇は其の外面精巧なる彫刻及燦爛たる金色に富み、最も傑出す。各堂の前には賽錢箱あり、戸は立派に銅板を以て蔽はれ、大なる錠を附く。人の言ふ所によれば、此等の堂には尊貴の方々の遺物が安置せらるゝ故に、内裏の爲に嚴封せらるゝものなりといふ。社の廻廊には數多の裝飾物ありて、其中に大洋上に於ける二蘭船の大圖額あり。是は一八〇四年に儀助といへる人夫頭の奉納せしものなり。*我等は次に淨運寺に至りて、日本の最初の娼婦なる友君の墓を見、更に室の町内及近傍を遊覽せり。此町は町及其の附近に産する美しき皮革細工によりても名を知らる。

【*譯註】此額は長崎内中町西山儀助・同惠美須町上田力藏の奉納せしものなり。故に原文に Jiski とあるは儀助なり。

二月二十七日室を出發し[1]、正條にて晝食を爲し、船にて此地と同名の河を渡れり。其の近傍には多くの製皮者住す。是れ卽ち所謂穢多の町[2]にして、彼等は階級中に入れられざるものなり。此夜壯麗なる城廓を有する姫路に着せり。行商人來りて極めて精巧に作られたる皮革細工を勸めたり。

姫路

【譯註[1]】是より陸路に就きたりと知るべし。

【譯註[2]】原文此處に「前章に記したる」とあれど、本書は參府の章のみを譯出せしものなるが故に、特に其の一句を省略せり。

二十八日市川を渡り、二三の名高き寺社を巡覽するため街道を離れたり。先づ曾根の天神社に至れり。此處に樹齡九百八十三年の老松ありて、大に珍重せらる。別の一樹は齡稍〻若けれども、幹甚だ大にして、非常に廣き地面を蔽ふ*。二樹とも立派なる樹木に富める清淨雅致の庭園に在り。社殿の內部には繪畫・金彩色・及彫刻を以て飾られたる華

曾根の天神

麗なる室ありて、實に美觀たり。

【譯註*】是 菅公左遷の時此地を過ぎて手植したりと傳へらるゝ曾根の偃松なり。

尾上神社にては大鐘を見たり。又石寶殿(イシノホウデン)社には高さ四十呎・幅三十呎の方形の石あり、下方尖りて小池中に在る小臺石の上に立つ。此の怪物は甚だ巨大なれども、高く山に據りて横はり、而かも其處にて此山より切出されたりとは思はれず。されど斯かる重量の物を引上ぐることは、日本にて不可能の事なり。故に此國にて、之に迷信的想像を附會するも、理なきに非ず。卽ち日本人の言によれば、或神が記念標として一夜の間に此石を立てたりといふ。

石寶殿

我等は洗川を渡り、高砂にて一佛寺を訪ね、美しき彫刻其他古寶物を觀たり。晚加古川*に達し、此處に宿せり。

加古川

【譯註*】原文に Kagasawa とあれど、加古川の誤なるべし。

三月一日兵庫まで旅行せり。同地は海港にして、我等の參府船は、先

兵庫

に室にて卸さゞりし荷物も、全部此地に陸上げす。此日我等は休みなく諸町村を通行せしが、其中大久保は谷地に在りて、風景殊に佳なりき。

明石

明石も亦立派なる都會なり。我等は其の市端にて橋によりて川を渡りしが、此橋は五十七本の軟石柱によりて造らる。午後スバ[1](Soeba)と

敦盛蕎麥

いへる一茶亭に憩ふ。此家は索麵の一種類を以て名高く、日本人等皆之を賞味せり。此の茶亭に面してシギスマイ(Sigismay)の碑及墓あり。彼はアヅモイノ天皇(Adsmoynotenno)の將軍且つ太子にして、平家との戰に此處にて戰死せしものなり[2]。一少年は我等の爲に附近の古蹟を案内し、且つ日本の歷史に於て有名なる此の戰爭に關して種々の物語を爲せり。

【譯註[1]】 Soeba は敦盛蕎麥を指すものなれど茶亭の名と誤信せしなり。

【譯註[2]】 案ずるに、此の墓碑は一谷の敦盛塔を指すものにて、敦盛戰死の事件を述ぶるものと見ゆれど、我が國史を知らざる外人の誤聞なるが故に解說し難く、シギスマイ及アヅモイノテンノ

1の本名明ならず。後者の音は稍敦盛に似たり。

大阪

二日、三日の兩日、我等は重に田野の間を旅行し、其間多くの釀酒家を見たり。街道は概して賑はひ、牛の牽ける一種の小車をも見たり。斯くて我等は西宮、尼ヶ崎、神崎等の諸都會を經、又淀川を渡り、晩六時頃大商市なる大阪に着せり。街路には好奇者充滿し、警吏も秩序を維持するに苦めり。徒歩にて入市するは元より望む所なれども、此の雜遝の爲に、我等は乘物を出でざりしかば、種々の立派なる店舗を意の如く見ること能はざりき。通過の際、大城を望見せり。城は多くの高櫓を具へ、壁と廣き濠とにて圍まる。但し慣例として我等は東上の時に此の市内を見物せず。蓋し此の旅行の主要なる任務は、將軍に參覲するに在るが故に、其の儀禮の終るまでは、心を遊樂に向けることを許されざるなり。されど我等の旅館には、役人、醫師、學者、其他の好奇者の來訪頻繁にして、彼等は先づ自分を披露し、然る後其の身分相當に接待饗應せ

られたり。

三月六日、大阪を出發し、淀町を經、同名の川に架せる木橋を渡れり。橋は三十六の拱門によりて造らる。此町にも廣き外濠を有する良き城廓あり。此晩伏見に着せり。此處には種々の小商品製造せられ、我等も多數の行商婦に襲はれ、彼等は商賣に老巧なるを以て、旅人にして何か賣附けられざる者は稀なり。

伏見

七日、伏見より京都に向ふ。其の距離は二時間行程以上なるが、其間商店及製造家の連續せる一街道を直行するのみ。陶器・種子商・野獸・鳥類・料理店・釀酒家・其他の倉庫無數にして、且つ數多の旅人ありて往來繁きが故に、此の街道の旅行は最も愉快を覺えたり。

京都

京都の旅館は大阪に優れり。訪問者は大阪に劣らず多數にして、此町の奉行等も例によりて各〻使者を遣はして挨拶せられたり。「ミヤコ」一名京都は內裏の居所にして、人口六十萬ありと稱せらる。壯麗なる

寺社多く、市內を貫通せる河流も、沃饒なる近郊も、皆美觀たり。又此市の婦女は日本に於て最も美人と稱せられ、工藝及學術も亦此地最も優秀なりとす。此地は全國各地の人々が、伊勢に參詣するため、又は美しき器物を買入るゝため集合する所なり。且つ此市は日本の樂園と言はれ、最も健康地と認めらる。我等は大阪に於けると同樣、外出すること稀なりしが、終日賣込商人・知人等の來訪絕えざりしかば、我等は幾分滯在期間を延長すること望ましかりき。

大津

三月十一日、大津に到る。此地は同名の湖水に臨みて風景に富み、夏時其の附近は遊船群集し、京都の市民は此地を以て其の遊樂地と見做せり。我等は此地にて晝食し、草津に至りて宿せり。

水口

十二日、水口に到る。此地は箒の纖維にて造られたる佳良なる細工品を產す。* 我等は天候甚だ不安にして、山地を越えて豫定の宿泊地なる關に程よき時刻に到着すること覺束なきを以て、偶〻之を買入るゝ機

會を得たり。

【譯註*】 水口は藤蔓細工・葛籠等にて知らるゝ處なり。其の誤聞なるべし。

十三日、此日我等は森林及山地を過ぎて進みしが、鈴鹿峠は殊に險なりき。諸村を經て坂ノ下に出づ。此處にては各戸殆ど皆宿屋を業とす。

關

關に達すれば、宿主は他處の多くの宿舍と同じく、鷄卵及野菜を甲比丹に贈呈せり。是れ欵待の意を表する爲にして、之に對して當方よりもアラック又はリキュールを二三瓶返贈するを例とす。

龜山

十四日、提燈を携へて出發せしが、大雪のため進行に困難せり。此月頃此の地方にて雪降るは稀有の事なりとす。龜山にては目的の場所に達するまで約半時間を要し、又嚴重に警衛され、旗幟・武器等を以て飾られたる堅固なる門を過ぎて進入せり。

富田

此日午後甲比丹は富田にて風景佳なる一旗亭に於て、我等に蛤料理を饗せり。是より町屋川に達して、四百五十舊エル* (oude ellen) の長さ

桑名

ある木橋を渡り、晩遲く桑名に到着せり。桑名は城を有する都會にして、地利甚だ商業に便なり。又桑名と宮とは鐵器の工業を以て名あり。

【譯註*】 一エルは一メートル程なり。

佐屋

十五日平野の間を溯河し、十二時に佐屋に上陸し、是より日光川を渡り諸村落を通過せり。フタッデカワ(1) (Foetatsdegawa) にて大なる水門を

宮

見、萬場村にて平底の舟に乘りて萬場川を渡れり。宮(2)に到れば、優良なる各種の鐵器を買へとて勸められしかば、我等の使用に適せざれども、其の精巧なるまゝ、數多買入るゝことゝなりたり。

【譯註(1)】 Foetatsdegawaの名明ならず。今蟹江川(日光川の東)と新川(萬場の渡の西)との間に福田川ありて、此處に水門ありといふ。故に或は此川ならんか。

【譯註(2)】 宮は今の熱田なり。

矢作川

十六日綿布工業を以て名高き鳴海町に到り、夕刻矢作川に達し、二百八間即ち六百アムステルダム・エルほど長き橋を渡りたり。此邊街道

は概して幅廣く清潔にして、兩側には杉及松を植う。我等は途上度々諸侯等に出會せしが、最も高貴なる者に對してのみ、我等は一時立停まり、他の者は大抵我等の行列のため道を避け、身分低き者は下馬し、又は駕籠を停めて、我等に敬意を表せり。岡崎の旅舍にては、宿主は盆に榛(ハシバミ)の實及乾蛤を載せて贈られたり。

岡崎

十七日、岡崎は一大都會にして、我等は市端に達するまで約半時間擔はれたり。此處にも城ありて高き櫓を備ふ。又此地は權現將軍の誕生せし處なり。道は平地と山地と交錯し、此邊一般に米麥を耕作し、又處々に蕎麥・菜・及其他の蔬菜を栽培す。我等は御油といふ一大都會にて晝食し、吉田*に宿せり。此市は工業地にして諸種の神佛裝飾具即ち偶像・造花・其他の玩弄物等製作せらる。此等の器具は日本人が雛祭の如き祭典の場合に家を飾るものなり。

吉田

【譯註】* 吉田は今の豐橋なり。

三月十八日、晝頃新井に至る。此地は淺けれども頗る廣き湖水に臨み、陸路江戸に赴くには、此の湖水を避くる能はず。入江の岸には渡船あり、此處に國立の大なる關所ありて、京都の所司代の通行券なき者は、凡て通行を許さず。是は帝國の大小諸侯が、隨意に首府を去り、又は之に赴くことを防ぐ政治方針より出でしものなり。此の關所は總ての荷物行李を檢査する權を有するを以て、人皆徒歩にて其前を通過す。甲比丹は關所長に挨拶し、我等一行の爲に、諸侯用の漆塗渡船を用達て、之に和蘭國旗を立てられたる好意に對して謝禮せり。漕行一時間半にして對岸舞坂に達し、此夜濱松に宿せり。此處に將軍の血族なる尾張侯の供人數多ありて、藩侯を待受けたり。

新井關所

濱松

十九日我等は此の立派なる一行の一部と同時に、平底の舟に乘りて天龍川の急流を越えたり。强雨の後、河岸即ち砂土は砂金にて燦けども、日本人は未だ之を分離する法を知らず。見附に至れば、町の過半は

天龍川

燒失して、只所謂防火土藏のみ此處彼處に殘れり。畫袋井にて午食し

掛川

名殘[1]に至る。此地は多く模樣を附けたる花莚を製出す。次で掛川を過ぐ。此地は甲比丹ヘンメー(G. Hemmij)[2]が一七九八年參府の途中病死せし處にて、彼は此地の天然寺に葬らる。此夜日坂に宿せり。此地

日坂

は小部落にして、特に錄すべきものあらざれども、只旅舍の家族は非常に丁寧懇切に我等を欵待して奔走至らざるなく、翌日も痛く分袂を惜み、宿主は其子息と共に半日間我等と同行し、少しも永く我等と離れざらんとせり。

【譯註】[1] 今磐田郡久努村岡本の內に北原川といふ處ありて、其の一部は東海道に臨む。此の部落が即ち名殘(Nagorie)なり。現時訛りてナグリと呼び、甚しきは名栗と書く者もありといふ。

【譯註】[2] Gijsbert Hemmij は一七九二年甲比丹として我國に來り、一七九八年參府を勤めしが、歸途病漸く重く、終に六月八日(寛政十年四月二十四日)を以て掛川に客死せり。因て翌日同地の天然寺に葬らる。享年五十二。出島日誌に據れば、既に六ケ月前より病めりといふ。長崎年表に新舊版とも天龍寺とあるは誤なり。尙本書六二頁の譯註を看るべし。(出島日誌・歷史地理第二十八卷第五號參照)。

二十日山道を登りしに、嶮岨にして甚だ困難せり。但し斯く登山に苦みたる時、休憩所を見出して、美しく愛らしき婢等より爭つて清水・茶湯・其他の飲料を勸められ、旅人等が一時其傍に休息し得るは、旅人に取りて特別意外なる愉快といふべし。我等は頂上の新茶屋といへる一茶亭に休憩し、他の旅客と同樣の待遇を受けたり。因て我等も日本の友人と同じく、此の地方の婦人の好評を是認せざるを得ず。是れ慣例に從つて此等の婢に記念として指輪・髮針・又は其他類似の小間物を與へたる所以なり。世に名高き富士山は此處より初めて望見し得たるが、其の白き山頂のみ他の諸峯の上に聳え、其他は雲に隱れたり。

大井川

次に金谷にて休憩し、正午に大井川に達せり。其の河床は優に一哩の四分の一の幅あれども、急流は僅に五十呎に過ぎず。されど水底は重き不齊の石塊にて蔽はるるが故に、徒涉は困難且つ危險なり。乘物は輦臺の上に長き棒にて緊縛せられ、各十二人乃至十六人によりて荷

ひ上げらる。又人夫の肩に乘る者もあり。水は殆ど擔夫の胸までも達する故に、仲間の者は全力を出して反對に彼等を支へ、彼等をして水流のため徒渉地點より押流さるゝことなからしむ。此等の輩は、此の困難なる勞働に對して高き賃銀を受くれども、彼等の當る危險と難事とを考ふれば、割に合はず。彼等は酷寒の節にても、定額の賃銀にて何時にても、直に此の業務に服せざるべからず。增水又は天候甚だ惡き時は、旅人は對岸の合圖によりて渡河し難きことを告知せられ、之が爲に幾日も河止めとなること往々あり。

島田

島田に到りし時は尙早かりしも、我等の豫定の宿泊地なる藤枝に出火ありて、其處に宿すること能はずとの報知に接せり。此の火災にて約三百戸燒失し、我等も翌日即ち三月二十一日同地を通過せし時に、其の慘狀を目擊せり。此日はウメシマ(Oemesima)[1]・岡部・丸子の諸町村を通行し、大井川と同樣の方法によりて安倍川を渡り、府中[2]に着せり。此市

府中

は工業を以て甚だ名高き處にして、諸種の編紐・挽物・細工・漆器等を產し、其他竹又は木にて巧に造りたる籃・箱等の道具を製出す。商人等は極めて精巧なる物品を集めて、室內一面に陳列せり。然し我等は從前の經驗によりて、懸値さるゝことを知るが故に、品物を選びたる後、代價につきての交渉纏まらず、彼等は夜遲くなりて全く斷念して空しく歸りたり。

【譯註(1)】 oemesima は前島の誤か。前島は今靑島町の內にあり。

【譯註(2)】 府中は今の靜岡なり。

倉澤

三月二十二日、興津にて晝食し、次で倉澤にて休息せり。此地は薩埵峠の麓に在りて、海上の眺望甚だ佳なり。小通詞は古き慣例によりて、此處にて一行を饗せり。我等は是より海濱に沿ひ又米麥の耕作されたる沃野の間を通過せり。前記の山脈にて、我等は多く花の滿開せる三叉樹を見たり。

原の庭園

二十三日、此日吉原にて晝食し、原に到る。此處にて或名家*に立寄りて、其の立派なる庭園・花卉・樹木・飼鳥等を觀しに、是まで觀たる同種類のものよりも遙に優れり。就中園中に立てる亭舍は最も雅趣に富み、同行の日本人も之を見て驚歎せり。清爽雅致にして種々の樹木に滿ち、其他珍奇なる植込、愛玩すべき盆栽・岩石・池水の配置皆宜を得、此の一小地點をして一樂園と化せしめたり。我等は瀟洒たる一小亭にて菓子果物の接待を受け、本邸に於て酒肴を饗せられたり。勿論斯かる時は何か物品を贈りて、謝禮の意を表する外なきなり。

【*譯註】此の庭園の持主は植松家なり。

富士山

此日天氣は特別快晴にて、富嶽は我等の面前に聳え、我等は絶えず其の山麓に沿ひて進みたり。此の地方は最も絶景且つ肥沃にして、我が筆も此の美觀を寫出し難し。日本人が常に好んで此の秀峯を種々の圖畫となすは、異むに足らず。我等も其の雄姿に惓くことを知らず、幾

箱根

度も立停りては、其の秀麗にして崇高なる自然を歎賞せり。此の地方は住民多く、頗る豐饒なり。又此山は既に久しく噴火せざるを以て、人皆安んじて此地に住み、毫も爆發を怖るゝことなし。

二十四日未明に沼津を出發し、三島を過ぎ、朝七時には最早箱根の峠を登り始めたり。されど天氣濕潤にして、雲霧地を蔽ひ、之に加ふるに道路石礫に滿ちて甚だ惡く、擔夫等殊に困難せり。此峠も土地肥え、自然の荒地あると同時に、耕作されたる田地もありて、凡ての美觀に於て、決して他の諸嶺に劣らず。道は馬車などにては通行し難く、乘物に座しても甚だ危險なる所間々あり。十二時半に箱根村に着せり。此處は風景宜しく、魚類に富めるトギッ湖(meer Togiets)に臨む*。此處及此の山中にては、塗物、彫物、及挽物の諸細工の最も精巧なるもの製作せられ、人一旦其の商店に足を入るゝ時は、購買慾を抑制すること能はず。箱根より數哩にして、畑の一富商の家に達し、やがて湯本に到着せり。此

湯本

處は往來の諸侯等を接待する設備ありて、土地の風習によりて茶菓等を出し、美婢をして給仕せしむ。府中よりも物價安かりし故に、我等は種々の寄木細工・其他美事なる籃細工・塗物細工等を購入し、晩十時に至りて小田原の旅館に着せり。

【*譯註】Togiets の名ケンプェルにも見ゆ。想ふに峠の轉訛ならんか。此處に meer Togiets とあるは勿論蘆の湖なり。

駕籠舁

斯かる困難なる旅行の時には、擔夫等に特別の酒料を與ふるを例とす。但し予は一言此等下賤の者を稱讃せざるを得ず。我等は京都より江戸まで全部同一擔夫を使用せしが、彼等は如何に苦しき場合に遭ひても、決して毫も不平の色を示さず、又曾て少しも停止せしことなかりき。

二十五日、諸町村を經、殷賑なる沿道地方を見て、藤澤に達し

川崎

二十六日には川崎に到れり。行くに從つて、我等は增々大都市に近

づきたることを感ぜり。即ち往來の頻繁・貴人の行列・壯大なる休茶屋を始として、衣服風俗等に見ゆる多少の異樣によりて、明に之を認識せり。此夜江戸滯在中の通詞佐十郎*が一友人と共に、我等を出迎ふるため突然來訪せられ、又江戸に於ける蘭人旅館長崎屋の主人も、同樣來りて我等に挨拶せられたり。

【*譯註】馬場佐十郎なり。(「ツーフ日本回想錄」一八二・二二八・二八八頁參照)。

品川

二十七日には拂曉より動搖始まり、人皆多忙を極め、服裝を改む。我等は九時川崎を發し、六郷川を渡り、十一時半に江戸の前市なる品川に到れり。京都より此地までは百三十三日本里にして、同數の時間を要する計算なるが、人間の驚歎すべき徒走によりて、全部之を踏破したり

江戸に入る

しなり。我等は此處に數刻休息して、我等及檢使・通詞の知友等が出迎に來るを待合はせり。二時此處を出發し、先に一八一八年に自身甲比丹を訪問したる薩摩侯の邸前を過ぎたり。行列の前後には、數人の警

士附添ひて、行列の秩序維持に當らる。されど群集は街道に充滿して、我等は殆と人家を觀る能はず、我等の鄕導は手荒く人民を逐拂へども、彼等が乘物の擔夫を押付くることを防ぎ得ざりき。我等は概して廣き街道を通行せしが、其の兩側は石を重ね、他の都市と同樣に家屋立列べり。此處には壯大なる邸宅及商店ありて、後者は暖簾を垂れたり。斯かる店舗殊に織物賣店にては、小僧等は聲高く叫びて商品を紹介し、通行人の注意を引付けんとせり。此處にても英吉利に於けると同じく商店の前に多く看板及文字を掲ぐ。唯此處にては馬車が喧囂と雜遝とを一層劇しくなすことなけれども、予は此市の活動狀態を比較するには、ロンドンよりも恰當なる處なしと信ず。

我等は品川に到着する餘程前より、無數の群集の喧騷を冒して、江戸市の一部と見做すべき大街道を行進せり。然して品川より我等の宿所までは、間斷なく普通よりも早足にて、尙優に二時間を費せり。長崎

長崎屋に到着

屋卽ち我等の旅館は*、御城に隣接し、御城は市の中央にして、直徑半哩ありと稱せらる。此の計算によれば、江戸全市は直徑にて五乃至六時間行程あるべし。

【譯註】* 日本橋本石町三丁目の長崎屋源右衞門なり。

斯かる大都市に進入するに當りては、自ら見物したき慾望も起れども、謁見日に市街に出づる外は、全く在宿するのみにて、唯我等を訪問する知友又は好奇者と應接する際に、彼等より聞知する知識を以て、滿足する外なきが故に、自然不愉快の感なき能はず。我等は午後四時半頃に長崎屋に到着せり。我等は四室を與へられしが、唯二個の窓が路次に面するのみにて、其他は皆內庭に面せり。甲比丹は二室を使用し、書記と醫師とは一の廣間を占め、第四室は共通用となし、且つ訪問者の應接室に充つるため、和蘭の椅子・卓子・敷物・其他若干の小家具を備へ、一見歐風室の觀ありたり。使用人等も同階の諸室を供せられ、檢使・通詞・其

他一行の從僕等は、皆同家の別の部分に入り、又獻贈品は火災に安全なる倉庫に收藏せられたり。我等の周圍に在る多數の附添人の中に、目付即ち探偵の在らざることは明白なり。此等の目付は、殊に江戸にては商人・僧侶・役人等樣々に變裝して現はるゝが故に、相當知友となりし者の外は、常に警戒して輙く人を信賴することを愼まざるべからず。但し僅か三人の歐洲人が、少時江戸に滯在する間に、此國に對して損害又は危險を企圖するといふ事は、予の到底想像し能はざる所なり。故に此處にて內密といふべきは、重に出島にて得難き器物珍品を手に入るゝこと、又日本人等が友人として紹介したる人々と規定よりも打解けて交遊することに過ぎず。旅館の門には二重の番所ありて、絕えず其の周圍を巡邏し、又通行人の立停まることを許さず。本來は役目のため我等と交涉する用ありて、豫め江戸詰長崎奉行の承認を得たる者の外は、何人も我等に面會を許さゞるなり。されど此點につきて、日本の

來訪客

「內分」といふ事は、頗る都合良きものにて、人若し宿主又は我等の附添人に紹介さるゝ便宜あれば、入來を許され、時としては我等は訪客の過多なるため却て迷惑することあり。勿論附添人等は先づ其人を我等に通告し、然る後之を案內せり。紹介狀を持參せし者亦少からざりき。然して其內或者を謝絕することは、難事なりしが故に、訪客往々室に溢れ、因て混雜を脫するため、又は同席を避くるため、一時室を去る者もありたり。江戸到着の後、奉行間宮は我等の檢使を隨へて、正式に我等を訪問せり。[1] 斯かる場合、其他凡て高官が役目にて來りし時は、先づ互に日本流に敬禮を爲し、然る後椅子を用ひ、凡て歐風にて接待せり。我等の重なる仲間は、前記の小通詞佐十郎[2]、醫師にてはボタニクス[3](Botanicus)の別名を有する桂川・玄澤・宇田川・長安[4]・グロビウス[5](Globius)の雅號ある天文方等にして、此等は皆蘭語を解し、日々一二の說明を求めたり。又中津藩侯の諸士も來訪して、其の主君の如く蘭名を求め、我等の風俗を

和蘭の友人

知得せんが爲に、好んで我等の許に在りたり。

【譯註】(1) 長崎奉行間宮筑前守なり。

【譯註】(2) 前には Saizjuro とあり此處には Saizjuro とあれど「前記の」とあるが故に同一人なるべし。佐十郎は此年七月(本邦曆)江戸にて死せり。

【譯註】(3) ボタニクスは桂川甫賢なり。

【譯註】(4) 大槻玄澤、宇田川玄眞(或は榕庵か)、湊長安。

【譯註】(5) グロビウスは高橋作左衛門(景保)なり。

拜謁の準備

拜謁の濟まざる內も、献上物を分配及整頓するため、用務少からず。特別献上物は表記され、羅紗は各卷とも兩面絨包され、然して各品は清き披露臺に載せらる。斯くて此等の品々は、我が使節が登城して之を献上する日に、御城に送られて、控室に置かる。役人及奉行屬僚等の度々の來訪によりても、如何に彼等が拜謁の指定日につきて、深く懸念するかを知るべし。殊に甲比丹の輕微なる不快も、彼等をして大なる恐

訪客及其の贈物

怖を起さしむ。蓋し此の儀式を遲滯せしむるか、若くは禮法に多少の過失ある時は、忽ち長崎奉行に通告せられ、彼は大に其の辯解に窮し、之に對して責任を免かるゝこと難かるべし。

此處にても商人又は行商人來りて、我等に美しき物品を勸めしが、通常長崎にて求むるよりも、餘程安價にて、且つ品質も遙に優良なりき。又所謂禁止物は持來らざりしも、之を得ることは、左程困難ならざりき。宿主も役人も、自分の都合にて友人又は知人を我等の許に伴ひ來るが故に、彼等は我等の喜んで面會する知人を拒むこと能はず。故に夜遲くまで訪客に應接すること珍しからず。殊に高貴の者は、秘密又は內分にあらざれば、來訪すること能はざるが故に、大抵夜に入りて來りたり。然して前以て贈物を送り來るを例とす。此等の贈物は、織物・塗物・美しき紙・扇子・文箱・煙草入・煙管等、即ちミセラシー物*(Miseratie's)(珍品といふ日本語の訛)にして、彼等は和蘭人が斯かる物品を嗜好するを知る

が故なり。其の贈物が高價又は貴重なる時は、甲比丹は返禮として何物かを贈る。但し充分愼重に第二者の手を經て之を渡し、斯くして我等の使節は特に我等の事務を管掌する奉行及其他の役人の好意を得ることを怠らず。成規にては、婦女は我等に面會を許さゞる定なれども、實際は婦人が此處に來訪すること、他の何處よりも頻繁なりき。或夜の如きは一人の紳士は六人の婦女を同伴して來り、之が爲に我等の持參したる菓子・リキュール酒等の貯蓄も急に減じたりき。

【譯註】Miseratie's は「めづらしゝ」なるべし。

婦人の來訪

斯かる訪問の際、婦人等は往々衣類を入れたる行李を開かしめて、不思議なる顏して其の仕立法を觀、且つ好奇心に驅られて、如何に此等の衣服が身體に着用さるゝかを知らんとせり。我等は之によりて、明に彼等の大なる感興と驚異とを認め、往々彼等に何かを贈與するか、又は其の遣はしたる使者の手を經て、價値ある品物を讓渡さゞるを得ざりき。兎に角彼等は記念として何かを求め、假令扇子・羽織・又は紙片に數語の和蘭文字を書きたるものにても、之を持歸れり。但し豫め其の訪問に用意せし時は、大抵之に指輪又は他の小間物を贈りて、客人を喜ばせたり。出島の甲比丹附の從僕は、能く蘭語を解せしを以て、斯かる場合、多く我等の私的通譯となり・殊に諸侯其他高貴の人々は、內分にて來訪せしが故に、政府の通詞よりも却て好んで我等の從僕を使用せり。

諸侯の來訪

貴人は多く夜遲く來り、翌日其の使者が贈物を持參し、我等の接待に對して謝禮するまでは、其名を告げず。斯かる折は少しも儀式張らず、彼等も往々其の從者と同樣、麻衣卽ち普通の平民服にて來り、主君が愉快に興に乘ずれば、從者も共に打解けて我等の談話又は其の質問に對する說明を書留めんとせり。彼等はいつも柔和にして愛想良く、熱心に歐洲の藝術・學術・風俗・習慣・又和蘭本國及其の印度領土の位置及管理等に關して、種々の質問を爲せり。されど彼等は彼等自國の政治につき

ては、決して一言も漏らさゞりき。我等は斯かる仕方にて、薩摩侯の家臣の訪問を受けたり。彼は贈物として美鳥十二羽・珍木十五株・雛鷄一番・家兎一番・鴛鴦[1]一番・及絹布數反を持來れり。是等は皆立派なる籠又は箱に入れたれば、其の入物の價額及費用は、却て中身よりも高價なりしならん。其他我等は松前侯・丹波侯・ミナガワ・サガミ[2](Minagawa Sagami)といへる將軍の側用人・將軍の弟なる水戸侯等の訪問を受け、尙中津・ヒラカタ[3](Firakatta)・尾張・加賀・其他の諸侯の藩士等も數多來りしかば、我等は無聊退屈を訴ふる暇なかりき。

【譯註[1]】原文に Waaijer-eenden とあり。動物學者の說に鴛鴦ならんとの事にて斯く譯出せり。

【譯註[2]】Minagawa Sagami は西丸側衆蜷川相摸守親文なるべし。

【譯註[3]】Firakatta は或は平戸ならんか、松浦靜山公か此年從者數人を伴ひて蘭人を訪問し、種々談話せしことは甲子夜話卷六十三に在り。

拜禮のため登城

四月六日　本日は日本の將軍に正式に拜謁すべき日なり。前夜檢

使は更めて正式に我等を訪問し、明日は相違なく朝六時に御城に出頭するやう注意せり。我等は同時刻に正裝して旅館を出で、供人も皆禮服を着用せり。此時獨り甲比丹は天鵞絨の服を着け、其の行列の內に大傘一個・刀一振・太き紐と總とを附けたる挾箱二個を隨へ、我等卽ち書記と醫師とは各挾箱一個を隨へたり。挾箱は長き棒にて一人により て擔はる。又乘物の側には、例により從者二人附添ふ。數分時進みて高壁に達し、橋を渡りて御城の入口に立てる第一門を過ぐ。此處に大番所あり、廣場の兩側には大なる建物立ちしが、外見は一般の日本の家屋の如く簡素にて、唯高く聳えたり。

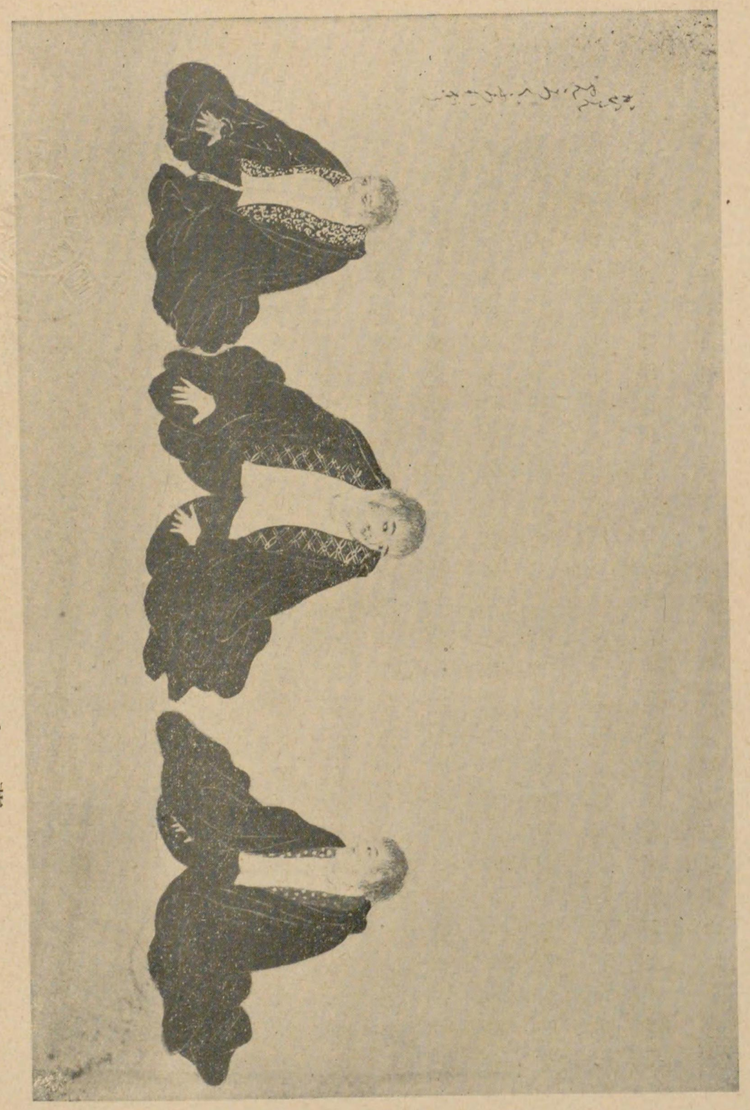
第二の橋にて乘物を下り、徒步にて第三橋を渡り、大門を入りて嚴かなる門衛の前を過ぐ。此の最後の門より我等は帽を從者に渡して露頭となる。是より更に廣き道を進みて、將軍の本丸の最後の門に對する所謂百人番に到る。此の番所にて一の控室を與へられ、此の拜謁日

百人番

に登城せらるる老中等の入城を待つ。其間に長崎奉行・外國掛・及番所長は來りて、日本の作法によりて挨拶せり。此處に二三時間留まりしに、登城者相次で押寄せ來り、何れも箒を持ちたる者先に立ちて、絶えず「下へ下へ」と叫びながら、石片又は蘆芥を掃き去りたり。御殿の門にて靜止し、諸侯又は如何なる高官も家臣一人と共に内に入り、唯傘を差しかけ、又は殿中にて刀と草履とを保管する一二の從者之に隨ふのみ。終に我等の順番となりしが、恰も雨降り出でしかば、我が使節は大傘を使用する機會を得たり。我等は第一第二の庭を經、次に卵形の小石を敷きたる大なる前庭を見たり。此の瞬間に於ける混雜と活動とは、御殿の入口まで廣がりたる庇屋根を有する大玄關に於てよりも、尚更予の注意を惹きたり。建物が高處に在るのみならず、一般の家屋の如く地上より數尺高く建てらるゝが故に、多分或地點にては自由に市中を望觀し得べし。我等は曲り曲り廣き廊下を導かれしが、右手には大なる

諸室列なり、左方は一樣に打開きたり。此等の室は日々御殿に參入する老中等の控室なりといふ。我等にも其の一室を與へられしが、甚だ壯麗なる構造にて、立派に塗且つ鑛金したる襖・疊・及天井によりて飾られたり。我等は此室の一隅に入り、一旦立ちて再び日本流に疊の上に下座し居りしが、室と廊下との間の障子は取去られしが故に、室前を通行する者は、絶えず我等を覗けり。此處に二三人の目付も座せしが、彼等は遠くより殿中全體を監視するが如く見えたり。長崎奉行・外國掛・茶坊主即ち小性等交〻來り、肥前侯も亦我等を訪ねしが、何れも皆甚だ丁寧なりき。されど無禮なる少年等もありて、彼等は往々平氣にて我等の前に立ち、近づきて頭より足まで我等を熟視せし後、全然挨拶も低頭もなさずして立去れり。* 因て我等も彼等を懲らさんと欲し、面には不平の色を示さゝりしも、着用せる長衣を頸まで上げて、我等を遮りたり。此室にて一時間ほど過ごせし後、我等は甲比丹に隨つて拜謁室に

赴きしが、第三番目の柱の處に甲比丹が拜禮を爲すべき場所指定しありたり。此室は甚だ大なれども、質素にして華美ならず。我等の持來りたる献上物は、清潔なる臺に載せて此處に陳列し在り。人の告ぐる所によれば、入口の正面に在る少しく高き場所は、將軍の出座する所、又其の左方は親族及老中等の席にして、以下身分に應じて之に次ぐといふ。此の御殿にて目に觸るゝ所は、高潔清楚を以て秀で、且つ他の建物よりも外觀豪壯なれども、我等の觀たる部分は、主として表向に使用するものなれば、華美豪奢を之に望むべからず。戸及襖の錠及引手は甚だ大にして、漆塗・鍍金及彫物に富めども、華美ならず。再び控室に還りし時、天候俄に險惡となりしが、幸に少時の急雨に過ぎざりき。さなくば、將軍は甚だ雷鳴を怖るゝが故に、拜謁は多分延期せられしなるべし。十一時頃に至りて、甲比丹は謁見の爲に呼込まれ、十五分ほど經て、再び我等の待てる控室に戻りたり。儀式の全部は、指定の場所に於て、日本



圖の裝服禮拜人蘭

（藏所館物博室帝京東）

はれな回二のと年五回と年元政文は府參のフホンロプ丹比甲り在に內此もルセッィフはれすと分回二第を圖此し若

流に拜禮を爲し、疊に頭を附けて「カピタンオランダ」と呼ばるゝまで、數秒間待つことなり。其際全く靜肅にして唯日本人が深き敬虔を感ずる時に出だす微なる囁の聞ゆるのみ。甲比丹に隨ひし者は、長崎奉行と大通詞とのみなるが、彼等は甲比丹に合圖を爲せしが故に、彼は入室の時と同樣、低頭の姿勢にて退出せり。座中多數の人々ありしかば、特に興味も好奇心も起りたれども、日本の禮法を傷るが故に、見廻はすこと能はざりしといふ。

【譯註】*此等の少年は將軍の若君等なるべし。

西丸にて世子に拜禮す

是より更に世子の御殿に赴きて同樣の儀式を行へり。但し世子自身は出座せられず、其の代理たる三人の老中に對して拜禮せり。西丸即ち世子の御殿は丘上に在りて風景宜しく、此處より御城の廣さにつきては大體の感念を得れども市の範圍につきては到底我等の觀望の及ぶ所にあらず。今日我等が幸に無事拜禮を了りたるは、甚だ滿足す

老中等を廻禮す

る所なれども、是より御城の石垣内に住める十三人の重臣等を歴訪するは、甚だ面倒厄介なる事なり。彼等は大抵家老を出して我等に應接せしめ、主君は尚城中に在りて歸邸せずと申譯せしめたり。されど實は彼等は思ふ存分我等を觀察せんがため、襖の蔭より我等を隙見せしものゝ如し。兎に角襖の裏には頗る動搖混雜ありしが故に、多數の人が我等を見んとて、此處に隱るゝことは想像に難からず。此の想像は一家を訪問せし時、確證を得たり。其時突然一の襖が倒れ、一團の婦人露出せしかば、彼等は我等接待の際に斯く禮法を壞りたるを深く恥ぢて、皆狼狽して遁去りたりき。各家とも我等に各〻煙管・煙草・綠茶の外、大盆に載せて菓子を出し、菓子は隨行の日本人が鄭重に包み、挾箱に入れて持歸れり。又諸所にて甲比丹の帽劒・我等の時計を觀んことを求められ、殊に予は各家にて、數枚の紙に朱墨にて文字を書かざるを得ざる不愉快なる位地に在りしが、此日の疲勞に加ふるに、壘上に正座の姿

諸奉行へ廻禮す

勢を保ちしかば、甚だ苦痛にして終には殆んど爲すに堪へざりき。我等が此の光榮なる儀禮を終りて旅館に歸りしは、夜九時半なりしが、是より尚幾多の訪問及來賀を待受けざるべからず。是れ恰も敬禮によりて我等の精力と健康とを試驗さるゝと同樣にて、終には唯熱病患者の如く身を動かすのみにて、大方之が爲に斃るゝならんと思はれたり。

翌日も老中等の場合と同樣に、江戸町奉行の邸を廻りて挨拶せり。同所にても家臣出でゝ我等を接待し、日本流に酒と暖き肴とを出して饗應せり。次に兩寺社奉行に廻禮せり。長崎奉行が我等の訪問を受けざるは、多分其の住宅が甚だ質素なれば、數多の諸高官の中より其の卑き狀態を我等に匿す爲なるべし。實際我等は、曾て長崎にて大に權勢を振ひし人が、今將軍の殿中にて從僕の如く奔走せるを目擊せり。一體將軍家の役目を勤むる者は、日本に於て重に高き位地を占むれども、從僕視せらるゝことは、予が夙に觀取し、然して時を經るに從つて、增

〻確信を强めし所なり。

暇乞登城

九日には我等が黑衣を着たる外、凡て六日と同樣の順序にて出發し將軍及世子に暇乞拜禮を爲せり。此時甲比丹は常例によりて絹の衣服を賜はりし外、特別に銀百二十枚を下賜せられたり。此の賜銀は約五百兩の價額を有す。其他我が使節は彼等が日本國と交通するに當りて遵守すべき將軍の條約文を讀聞かされたり。此の嚴肅なる聽聞終りて旅館に歸れば、老中・寺社奉行・町奉行等の使者來りて、主君に代りて告別し、且つ我等の贈物に對して謝禮せり。此時彼等は返禮として各〻數枚の絹衣を差出せしが、其の品質は將軍の下賜せるものより劣りたり。

日本橋

我等は拜謁を爲せし際、市の一部殊に日本橋を見る機會を得たり。此橋は市内を流るゝ小河に架せられ、全國の距離は凡て此橋を基點として計算せらる。此橋に關しては、他に記すべき事あらざれども、唯其

の開橋の時に、サマサキセイサイモン(Sa ma akie Sje:aymon)といへる百四十三歳の老翁が、橋の長久の象徴として、渡初式を爲したりといふ。彼の妻は百三十九歳、其子ゼーソー(Zeso)は百十二歳、其の妻は百九歳、又此の夫婦の男子は九十二歳、其妻は八十九歳にして、此等も亦七十歳の男子を有せり。又此の男子の妻は六十九歳にして、四十一歳の男子と三十九歳の媳とを有せりといふ。日本にては百歳の高齡に達した*る人珍しからざれども、是は實に例外の聚合と謂はざるを得ず。

【譯註】松浦靜山公の甲子夜話を見るに、第十卷に左の一節あり。太平の人瑞なりとて林氏一紙をおくる。實に其言の如し。

奥州南部盛岡一野村百姓

延寶八	庚申生	山崎清左衞門	當午	百四十三
貞享元	甲子生	妻 さん		百二十九
正德元	辛卯生	子 清藏		百十二
同四	甲午生	妻 せき		百九
享保十六	辛亥生	孫 清之丞		九十二
同十九	甲寅生	妻 ふし		八十九

寶暦三癸酉生　曾孫　清之助　七十
寶暦五乙亥生　妻　はな　六十八
天明二壬寅生　玄孫　清右衛門　四十一
同　四甲辰生　妻　さつ　三十九

清左衛門田地二千石餘の者のよし、書面の外何れも子ども多く候へども、次男以下は略して不記。清左達者にて無病故、去夏頃より杖用候へども、未だ六七里ぐらゐは歩行仕るの由、如斯五夫婦のそろひたるも世に有難き目で度きことなり。

本文と對照するに、一人の齡に六十九と六十八との相違あるのみにて、他は全く同一なり。故に兩者同一件なること疑を容れず。尙甲子夜話第十四卷に「今年壬午夏日本橋掛直しあり、總て新橋の渡り初には年高き人渡り始ることとなりとて、此度も長壽の老人何人渡り初めするなど、專ら世にとり沙汰あり」とあり。前の長壽者一家の記事も此の記事も、同じく文政五年壬午の記錄にして、西暦一八二二年に當り、卽ちフィッセルが東上せし年なり。案ずるに、フィッセルは日本橋を廻、又其の新橋の近く落成するにつきては、慣例によりて長壽者が渡初式を行ふべきことを知り、且つ來訪の靜山公などより奥州に珍らしき長壽者一家の在るを聞き、皆之を混同せしものならん。當時奥州より一家擧りて江戸の渡初に來るなど、あり得べき事とは思はれず。

官醫の集會

四月十二日、此日我等は官醫團體の爲に集會を開けり。是はいつも一回檢使列席の上にて公然開かるゝものなり。其數は十六人にして、

學者の質問

殆ど五時間に亙りて種々の質問を發して我等に寸暇を與へざりき。其の質疑は多く彼等の專門學術に關し、概して頗る研究的にて、我等の醫師の答辯を駁論することもありたり。故に我等の醫師は正に之によりて其の學識を試驗せらるゝものと謂ひ得べし。

十三・十四の兩日も前日と同樣に、幕府の天文家・博物學者及數名の醫師等來訪せり。甲比丹は不快のため、此等の訪客に應接すること能はざりしかば、予は之に代りて、如何に困難なる質問にても、努めて之が答辯に當り、予の學ばざる學科にても、此等の學者の知識慾を滿たさんとせり。研究の諸點は重に制御器・晴雨計・及寒暖計の發明及効用、計時法・羅針盤・大洋上の經度・日月及諸星の運行・其他物理及數理上の諸問題なりき。予は自分の學識よりも、寧ろ携來りたる二三の書物に依りて、多少彼等を滿足せしむることを得たり。幸に此等の學者も、浮世の大なる嗜好者なりしかば、予が彼等の注意をリキュール酒及菓子に向くる

や、一座皆喜んで之に心を移し、予は之によりて面目を施せり。

此等の職務上の訪問は煩累なりしも、學者其他の者より成れる所謂和蘭の友人等と代り代り交遊せしことは、我等の江戸滯在中最も愉快なりしと告白せざるを得ず。然して是れ我等の宿主源右衞門の家族・檢使・通詞・甚左衛門及作三郎等が甚だ溫柔にして、凡て我等の交際を默許したるに因りしものにて、若し彼等が之と反對なりしならんには、我等は江戸にて甚だ退屈なる日を送らざるを得ざりしなるべし。

親睦の宴

檢使と宿主とは、特別立派なる一宴を張りて我等を饗應し、江戸の贅澤と作法との概念を披露するため、費用も心勞をも惜まざりき。所謂和蘭の友人等は、斯かる折に多くは和蘭服にて列席せしが、此等は昔時より追々に集められしものなれば、之を併用する時は、極めて滑稽なる服裝となるなり。彼等は斯樣に爲し、且つ喜んで我等の用務を果し、我等に對して實に純眞なる友情と好意とを示されたり。故に予は誰か

に依賴すれば、一夜和裝せる我等を案内して、市内を遊覽せしめられしならんと思ひたり。されど斯かる順良なる人物をして危險を冒さしめ、萬一國法を犯せしこと發覺すれば、是れ實に許容し難き事なり。何となれば、江戸の如き大都市にては、些細なる壓迫又は輕微なる抑制をも愼まざれば、人民雜遝のため非常なる混亂と面倒とを惹起すべければなり。我等が街道に向へる窓に面を出せし時、警察又は强力により て群集を退去せしめ難かりしかば、己むを得ず我等に面を出さぬやう懇請したる實例あり。我等の滯在中屢〻失火あり、或夜の如きは市内三ヶ處に同時に火災起り、我等は屋上の露臺に上りて、能く之を見ることを得たり。其内一は餘り遠からざりしが、風の方向によりて我等の寓所が延燒の虞なきを知りしかば、最早其の結果を憂へざりき。翌日人の語る所によれば、唯一町内の燒けしのみにて、人皆之を上首尾と見做せり。

市内の火事

我等の滯在中、最後の數日も訪客絶えず、出發日の朝まで止まざりしが、長崎奉行及江戸町奉行の家臣來りて告別するに及んで、始めて打切りたり。

江戸出發

四月二十一日　我等が混雜より脫せしは、午後四時なりき。旅館內外の動搖は筆紙に悉し難く、我等が街道に出づるや、命によりて群集の大雜遝に對して乘物の窓を鎖せり。我等に隨へる護衛は人民を逐拂ふため暴力を用ひしも、尙彼等は和蘭人を見んとて互に押合ひたり。薩摩藩邸の前にて、我等は乘物を下り、門に近寄りて徒步し、尊敬すべき老侯の家族に敬意を表せり。老侯は現藩主と共に特に窓に面を現はされたり。斯くて六時半頃品川宿に到れば、我等の江戸の友人等待受け居れり。彼等は此夜此處にて我等と語り合ひ、訣別するため來りしなり。

中津侯の二子

四月二十二日旅行を續けしに、二哩ほど先きの大森にて、中津侯の二

子我等を待受けたり。彼等は多分江戸にて好機會を得ざりしかば、內分に我等と出會せんため此處まで來りしなり。兄なる人は甚だ溫和に蘭語にて "Eerstemaal gezien"* と言ひて、我等の挨拶に答へたり。是れ日本人相互初めて面會せる場合、彼等が日本語にて挨拶する常語なり。此の若君はマウリッ(Maurits)といへる和蘭雅名を有し、父君と同じく、頗る我國及我が風俗に心醉せる者と見えたり。江戸にて度々我等を訪問せる家臣數人彼等に隨伴せしが、今彼等も亦我等と訣別せり。

【譯註】* 此の蘭語の意義は「初めて御目にかゝります」なり。Maurits と號せる兄は奧平昌高の長子昌暢なるべし。

我等は東上の時と同じ街道を取りて歸旅を進めしが、夏季に獨有なる美衣にて飾られたる勝景の地及溫雅なる天然を見出せり。原にては先きに往途の時、大に其の絕勝を賞讃したる綺麗なる邸宅及庭園に再遊せしに、咲き亂れたる種々の美花と滴る如き綠蔭とによりて更に

ヘンメーの墓

感嘆を深うせり。

掛川にては天然寺に至りて和蘭甲比丹ヘンメーの墓に詣でり。立派なる墓石は和蘭文字を刻し、石垣を廻らせども、石垣は倒れ地面は陷落するが故に、我が使節は年々維持費を寄進する例なり。*

【*譯註】ヘンメーの墓は長方形にて蒲鉾狀を爲し、地上に横たはる。其の表面に左の和蘭文を刻す。

HIER ONDER RUST
HET STERFELYKE
GEDEELTE VAN DEN
WELEDEL ACHTBAAR
HEER MR GYSBERT
HEMMY IN ZYN
EDELENS LEEVEN
OPPERKOOPMAN
EN OPPERHOOFD
VAN DEN JAPANSEN
HANDEL GEBOOREN
DEN 16 JUNY 1747 EN
OVERLEEDEN DEN
8 DITO AD 1798 EN
BEGRAAVEN DEN 9 JUNY
1798

其の法名は同寺過去帳に通達法善居士とあり。維新前まで長崎の蘭館より年々香花料金二兩を納めたりといふ。（本書三〇頁參照）。

四月三十日名刹ゴーゾージ*(Gozozi)に到りて權現將軍の種々の遺物を觀たり。彼は此の地方に生れ、且つ成長せしものなり。恰も此寺の守護者の緣日に當り、寺の附近及境内にては法事及餘興など行はれ、寺の周圍は旗幟及造花にて飾られたり。權現樣の遺物即ち武器・衣服・樂器・文書・圖像其他の寶物は、最も鄭重に取扱はれて、我等に示されたり。之を拜觀し得たるは、特別の名譽と見做さるゝが故に、我等は高僧には低頭して謝禮し、從僧等には一分金數枚即ち約三グルデンの價額のものを贈與せり。

【*譯註】三河國本宿附近の法藏寺なるべし。此寺一に出生寺と稱し、家康幼時此寺に在りて手習せられたりといふ。

五月六日京都に着し、八日京都の所司代及町奉行を訪問して敬意を表せり。接待は江戸の老中等と同樣なれども、只京都にては彼等自身面會せられたり。

京都の出發を急ぎしが故に、一日唯有名なる知恩院と祇園社及大佛とを巡覽せり。大佛にはケンプェルの書に記載せる如く、三萬三千三百三十三の佛像整列せり。

慣例によりて有名なる料亭二軒茶屋*に至る。我等は屋外の幕内にて懇切に接待せられ、厚き饗應を受けしが、訪客及同席者の甚だ多く集まりしを觀れば、或は京都の市民に遠來の外國人を見る機會を與ふるため、特に我等を此處に招ぎしには非ざるかと、我等に疑念を抱かしめしも、決して理なきに非ず。

【譯註】* 祇園の二軒茶屋なり。

大阪

五月十三日大阪町奉行に面會のため出頭せり。此の町奉行も年々我が贈物を受くるなり。我等は其の饗應を受け、之より二三の寺社を觀、且つ此の有名なる商業市を巡遊せり。次日壯大なる劇場に至りしに、我等及隨行者の爲に上等席を供せられたり。悲劇・劍闘・所作等交々

演ぜられ、題目は重に此國の舊史に關するものなりき。裝飾及衣裳は甚だ美麗なりしも、婦女の役は男優によりて演ぜられ、又其の奏樂は惓怠を催せり。是れ我等の唯一の感想にして、其他は能く自然的演出を爲すものと認め、且つ概して總ての點に於て我等の期待以上なりき。

大阪以西

大阪より兵庫に向つて出發し、其地にて又重なる諸寺社を觀、五月二十二日船に入りて翌日解纜せり。二十五日鞆に上陸して飲用水及飲食物を求め、五月二十八日下關に到着せり。是より小倉に渡り、陸路長崎に向つて歸旅を續けたり。之と同時に、行李の大部分及途中の買入物は參禮船にて發送せしが、之も我等より數日後れて目的地に到着せり。

長崎歸着

六月四日夕刻長崎を距る約二哩の地に在る矢上に到りしに、通詞其他待受けて我等の無事歸還を賀せり。既に前夜大村にて、我等は同行者と別離の宴を張り、甲比丹は彼等に記念品を贈りたり。矢上にて荷

箱・行李等一切檢査の上封印せられしが、頗る寛大に默認し、禁止物隱匿しありしも、皆其儘通過せしめたり。六月五日早朝出發せしに、矢上と長崎との間にて、時々我等の知人の出迎を受け、終には出島に留めたる我が同胞も出迎へられたり。我等は百二十日間不在にて、其間全く他國人の間にのみ在りたれば、今再び彼等を見るは實に愉快なりき。最後の數日は炎暑のため大に疲勞せしが、今や此の重要なる旅行を遂げて再び閑寂なる出島にて、自由安靜に休息し得るは、頗る欣喜に堪へず。

此の旅行は急速且つ紛雜なりしが上、制限に服從せざるを得ざりしかば、知識慾は唯一部分滿たされしのみ。尙一層迷惑せる事は、學識と旅行の經驗とを具へたる日本人が、忠實に補助協力するに非ざれば、種々の事物に關し、將又社會の繁榮及文化の實證に關し、諸方より旅行者殊に外國人の興味を喚起する場合に、半可通の見識を作りて之を應用する事是なり。更に玆に記憶すべき事は、恐らく世界の最大都市たる

日本の首府に至りし者は、全世界の人類中、唯八人の和蘭人が現存するのみなる事なり。予は後日此國の事情を一層知得したる時、再び江戸旅行を爲す機會を得るを樂みしが、荷倉役即ち甲比丹の次席となりしため、却つて甲比丹不在の間、出島の事務を負はされたり。然して予は一八二九年此の地位にて日本を去りたれども、若し此書が幸に我が國人の寛大なる稱讃を得ば、予の日本に於ける長き在留の追懷と、此の國土及人民に關する知見に多少寄與せんとする不斷の努力とは、之によりて報えらるべく、是れ予の最も欣快とする所なり。

異國叢書

ヅーフ日本回想錄

附フィッセル參府紀行

非賣品

昭和三年八月五日印刷
昭和三年八月十日發行

譯註者　齋藤阿具　東京市本郷區駒込千駄木町五拾七番地

發行者　奥川榮　東京市京橋區新榮町三丁目一番地

印刷者　櫻井兵太郎　東京市京橋區本湊町七番地

發行所　東京市京橋區新榮町三丁目一番地　駿南社　振替東京七五四四〇番

〔東京七星社印行〕

5
4

555
47